

まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較： 歌われる童謡を巡って

著者	張 晟喜
雑誌名	科学研究費助成事業 研究成果報告書
ページ	1-7
発行年	2020-06-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/00024407

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：32675

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13437

研究課題名（和文）まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較－歌われる童謡を巡って

研究課題名（英文）Comparison of Children Songs Written by Mado Micho and Yoon Sockjoog: Singable Songs and Its Characteristics

研究代表者

張 晟喜（JANG, Sunghee）

法政大学・国際日本学研究所・研究員

研究者番号：90793084

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000 円

研究成果の概要（和文）：まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡がなぜ歌い継がれるのかという研究で最も重要な鍵は、分析視点であった。研究過程で歌い継ぐ主体は子どもであるという原点に立ち、その行為の源泉を探求するときに、童謡に対する子どもの共感という視点を見出した。それで、個々の童謡に秘められた子供を共感させる要因となる心持を語彙で表し、それを「共感要素」として作品の分析指標とした。その結果、両者の歌い継がれている童謡には多様な共感要素が含まれ、その示す指標も「楽しさ、おかしさ、優しさ、面白さ」などの子どもの心を解放する要素が多いことがわかった。これによって、歌い継がれることの一つの実証的分析結果が得られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日韓の童謡の歴史は100年に及ぶ。その多くは時とともに歌われなくなり、一部は歌い継がれる。その要因の違いを知るために、歌い継がれる作品の多いまど・みちおとユン・ソクチュンの童謡を分析した。その手法として用いた「共感要素」は、子どもが歌い継ぐ本質に迫る実証的分析指標であり、両国の童謡全般の研究への可能性も広げ学術的意義は大きい。

現在両国とも子どもにとっての童謡環境は混同とした状況である。その中で、歌い継がれる要因の解明は今後の童謡の在り方の指針となる。また、研究の総括として催した『日韓童謡国際フォーラム』は、日韓の今後の童謡研究の出発点となって社会的にも有意義であった。

研究成果の概要（英文）：The analytical viewpoint forms the most vital key component in this research examining why the children's songs of Mado Michio and Yoon Sockjoog are sung and passed down the generations. This study returned to the origin that the main agents passing these songs on were children. As a result, when exploring the source of this behavior, this research discovered the viewpoint of children's sympathy toward children's songs. This research, thus, expressed in words those feelings hidden in each children's song that served as factors that caused children to sympathize. These words were used as [sympathy factors] and were treated as analysis indices for each piece of work. Through this approach, it was found that children's songs by both poets include diverse sympathy factors, with indices of these words that release the children's emotions. These results provided an empirical analysis result on why these songs are sung and passed down the generations.

研究分野：児童文学、児童文化、童謡、日韓童謡比較

キーワード：まど・みちお ユン・ソクチュン 童謡 歌い継がれる 共感要素

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

1．研究開始当初の背景

(1) 大正期に日本と韓国において芸術性と情操を主眼とした童謡創作が始まった。その運動の歴史はほぼ 100 年に及ぶ。その間、多くの童謡は現在歌われなくなっており、また、近年の歌でも歌い継がれるものは少ない。しかし、その中でも長く歌い継がれている童謡が存在することに研究者は注目していた。

(2) 研究者はこれまでまど・みちおを研究し、また子供時代に韓国でユン・ソクチュンの童謡に親しんでいた。このような背景で、研究者はまどとユンの童謡には歌い継がれているものが多いことに着目していた。そして、まどとユンの歌い継がれている童謡を分析すれば子どもが真の自己表現として歌う童謡の本質を知る手がかりが得られるだろうとの着想をもった。これらが研究を始めた背景である。

2．研究の目的

(1) 本研究の目的は、歌い継がれる童謡の特質は何かを見出すことであった。そのために、研究者はまど・みちおとユン・ソクチュンの童謡を分析対象とした。それは、二人の作品には歌い継がれている童謡が日本と韓国の他の作家に比べ多いからである。両者の童謡の分析から得られる結果は、歌い継がれる要因の発見であり、それが研究の第一の目的であった。

(2) 第二の目的は歌い継がれる要因を知ることから得られる有効性である。一つは、子どもが求める童謡の本質は何かを知ることによって初めて可能になる童謡論の再検証である。従来の童謡論は観念論的側面が強いのに対して、本研究は童謡論に具体性を加味した検証を行うことができる。二つ目は、具体性を持った童謡論による現実的な童謡への貢献である。それは、日本と韓国の童謡文化の現状分析と今後の童謡文化の方向性を得ることであり、それは子どもの将来と日韓の交流にも有意義である。

3．研究の方法

(1) 資料の収集と分析：まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡資料と研究図書を収集し、ユンの童謡の日本語訳をした。同時に、日韓の歌い継がれる童謡の現状を把握するために童謡曲集・CD やその他の情報を収集した。次に、まどとユンの童謡から歌い継がれている童謡を抽出し、それらの童謡の中に歌い継がれる童謡の要因を見出した。その方法は子どもの童謡に対する「共感」という要素分析である。

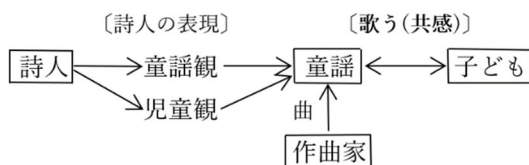
(2) 研究成果の国内外発信：分析の進捗にしたがって、研究発表、フォーラム開催などを通して、国内外の童謡研究者や関係者との意見交換に努めた。

4．研究成果

(1) 分析資料の選定：日韓の歌い継がれている童謡全体の中でまど・みちおとユン・ソクチュンの童謡が多いという点については、本研究の日韓童謡の収集全体の中での比較によって裏付けられた。

(2) 分析視点の新たな構築：研究者は童謡が歌い継がれる要因分析のために[共感要素]というものを導入した。共感というのは右に示した童謡生成図の右側のプロセスである。一般的に子どもが童謡を歌うというプロセスの現実には実に

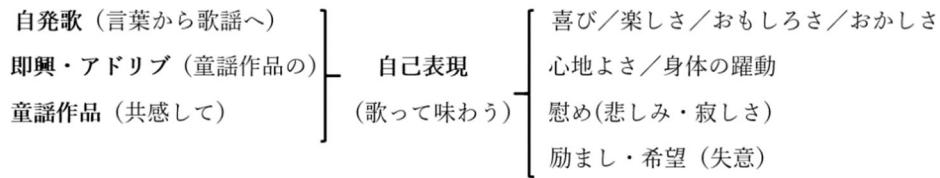
多様である。自分の心の衝動で自ら歌う以外に、ある場合は家庭・教育現場・マスメディア等の大人側の思惑や作用が働く。しかし、歌い継がれるという視点に立てば、子どもがその童謡を自分の自己表現として歌いたくて歌うことを想定するのが自然である。子どもは本来自己を発露し続ける存在であ



り、長い年月を経れば大人からの作用は淘汰されるからである。そのような自己発露として歌う子どもと童謡とを結び力が共感である。何かを感じ何かを求めて歌う。逆の見方をすれば、その何かを子どもに与える童謡が子どもに選ばれて歌われる。その何かを一言で示すのは実に難しく、研究者はそれを複数の要素の総体として表した。そして、その個々の要素を[共感要素]とした。それは、歌うときに感じる個々の心持ちや体感である。分析に有効とした語彙数は約 200 で、原則として一単語である。その上で、この共感要素を三段階のカテゴリー項目に分類し、「共感要素表」を作成した。最初の大項目は「気持ち、感知する感覚、知性・理性の働き」である。その下の項目は、「気持ち」を例にすると、気持ち 「安心・不安、幸せ、寂しさ・悲しさ、詩情、怒り、感動、驚き、好み」などである。この下位に共感要素がある。例えば「安心」の項目には、安心 [静けさ・落ち着き・安心・平安・くつろぎ・なごみ・無心・超然] である。

(3) まどとユンの童謡の共感要素：作品に共感する個々の心持ちや体感を[共感要素]とし、まどとユンの童謡の共感要素を集計した結果を考察した。それぞれ 50 曲ずつの童謡に認められた共感要素はまどが 269、ユンが 248 で、平均すると 1 曲に約 5 要素があった。それらの要素の「共感要素表」中の分布で全体的大きな特徴は、両者の作品ともマイナスの暗い領域がないことである。その他、二人の共通点で際立つのはカテゴリー「感知する感覚 美・醜・良・悪」の共感要素[音・リズム]が多いことである。もう一つの際立った共通の共感要素は、カテゴリー「知性・理性の働き 想像・比喻」で、両者とも非常に多い。この「想像・比喻」に属する主な共感要素を曲数も合わせて示すと、まど：[空想 10・連想 17・ファンタスティック 7・ウィット 7・ユーモラス 14]、ユン：[空想 5・連想 19・ウィット 16・ユーモラス 1]であった。また、まどとユンの共感要素が全体的に似た分布を示す中で、細かく見れば相違の表れた共感要素もあった。たとえば、上の[ウィット・ユーモラス]で、まどはユーモラスが多く、ユンはウィットが多い。この違いは作品の醸し出す世界の微妙な違いを示している。その他、カテゴリー「気持ち 興(きょう)」の共感要素では、まど：[面白い 20]、ユン：[面白い 4]。カテゴリー「気持ち 対人的感情」では、まど：[慈しみ 1]、ユン：[慈しみ 10]などの違いもあった。このユンの[慈しみ]の多さは、モチーフによる比較で幼い弟妹に対する慈しむ歌が多いことから類推できた。しかし、まどの特徴として挙げた[面白い 20]は、[気持ち 興(きょう)]の領域で、モチーフからは類推できない要素である。ここに[共感要素]の意義がある。この[面白い]は、つい笑いたくなるような「おかしさ」ではなく、興味そそれれ心ときめかす意で、実に深く広い意味を含んでいる。レイチェル・カーソンが、人間にとって不可欠な感性として尊んだ「The sense of wonder = 神秘さや不思議さに目を見はる / 驚嘆する感性」に通ずるものである。もちろん、共感要素は個々の要素としては語彙の限界上その深さや微妙さを十分示し得ない部分もあるが、それでも指標としての働きは重要である。さらに、一つの作品が多様な共感要素の総体によってその個性が示せることは、作品分析や作家比較だけでなく、時代的変遷を知る上でも手掛かりを与える。

- (4) 歌い継がれる要因：歌い継がれるという実態に大人が関与している一番自然な例は、家庭内、特に親や祖父母から伝わる場合である。その年代差を超えて童謡と一緒に歌うということは、大人自身が童謡に共感していることを示す。レイチェル・カーソンの言葉が示唆を与える。「(前略)生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があります。」童謡が歌い継がれる要因には幼稚園・学校・マスメディアなどの影響も考えられはするが、長い年月の淘汰の力を考えると、カーソンが言うように共感を持って共に歌ってくれる大人の存在が大きいことは間違いない。このような心の動きを考察するには、童謡生成の歌う側のプロセスをより詳細に検討する必要がある。



左は歌うときの形態、右は歌わせる力となる心持ちを示す。歌い継がれるという論点では、子どもと一緒に歌う大人の共感も重要である。つまり、童謡が世代を超えて歌い継がれるためには、それらの童謡に大人をも共感させる力と要素が豊かに込められていなければならない。2011年の東日本大震災発生時に、絶望の中にあった子どもや大人が慰めと希望を求めて、やなせたかしの「アンパンマンのマーチ」をラジオ局に多数リクエストした。その歌が励ましと希望の共感を呼ぶことを思い出したからである。歌い継がれる歌は必ずしも日頃歌われるとは限らない。それは必要な時に真の共感を与える力を持った歌である。

(5) まどとユンの童謡観：まどの大事な思想は「子どもは大人の常識に縛られていく」というとらえ方である。このことは言い換えれば、「子どもは成長するにしたがって本来持っている感性を失っていく」ということである。まどの童謡創作には、子どもたちを大人たちの既成観念の呪縛から解放してやりたいという思いが強く働いている。まどの要点をまとめると次の通りである。童謡は子どもへの「よき遊びの贈り物」。童謡の使命は子どもにとって「面白い」こと。子どもは未知を愛し、知らないことに直感的、歓喜的に認識的に反響する。だから、子どものものごとへの感応する潜在能力の高さを認め、それを尊重する。

ユンは子どもにとって童謡はどういうものであるべきか、子どもとは何かという子どもの世界についての確固たる信念と確信を持っていた。「ため息と悲しみを童謡から追い出そう！彼らの心を喜ばせよう！」これがユンの信念である。童謡の歴史を見れば、初期の[悲しみ]や[寂しさ]もその当時は子どもにとって必要な共感要素であったと想像される。逆に言えば、ユンが童謡を作り始めた時代に、ユンは[悲しみ]を追い出して「天使主義・楽天主義」と批判されたわけだが、[悲しみ]を含まない童謡もまたその当時の子どもにとって、欠くことのできない共感要素であったことをユンは証明した。この二人の詩人の共通したキーワードは「子どもの心の解放」である。それゆえに、二人は、童謡の中に子どもの共感要素[楽しさ／嬉しさ／おもしろさ／おかしさ／心地よさ／心身の躍動]を求めた。まどとユンの童謡の共感要素全体の結果から言えることは、確かにまどとユンの童謡には上の図で示した自己表現として味わいたい右側の要素が複合的に散りばめられているということである。やなせたかしの「アンパンマンのマーチ」の[励まし]という共感を呼ぶ強さには自身の真剣な人生体験が背後にあったのと同様に、まどとユンの童謡にも彼らの人生体験による共感力とでもいえる力がある。本研究では、[面白い] [慈しみ]のような一つ一つの共感要素の強さと深さは指標として十分には表しきれなかったが、作品の全体の共感力という点では共感要素の総体の姿によって二人の童謡が歌い継がれる要因を持っていることを証明し得たと思う。それとともに、本研究によってまどとユンの目指した童謡への思いが実際に彼らの童謡に反映していること、またそれぞれの時代の子どもの童謡に共感して歌い、その子どもが大人となってまた子どもと共感して歌うというプロセスの一端を示すことができた。

最後に共感要素の分析例を、まど・みちおの「きのこ」で示しておく。

き き きのこ/きのこ ノコノコ ノコノコ/あるいたり しないけど/ぎんの あめあめ/ふったらば/
せいが のびてく/るるる るるる/いきてる いきてる/きのこは いきてるんだな/ほんとに/(第1連)

初出は1966年で、今でも幼児に人気のある童謡である。CD・歌曲集への採録数が122件ある。子どもは自分がキノコになったつもりで歌う。音の繰り返しやオノマトペは共感要素「音・リズム」だが、歌いながら体を動かすことも考えて「感知する感覚」「爽快」も推定した。それに、じっと動かないように見えても生きていて大きくなるのだと新たに気づくことは、子どもにとってそれ自体面白く、興味が広がる。また、きのこに同化している自分も大きくなっていくという面白さ、それらが総合している。共感要素は「音・リズム」「気づく」「連想」「興味」「面白い」「ユーモラス」「爽快」の7要素となる。

(6) 本研究の学術的な独創性と意義： 従来の「童謡論」は作者である詩人の児童観・童謡観の側面が強く観念論的であった。それに対し、本研究は童謡の享受者である子どもが歌う際の童謡への共感という点に着目して、新たな「共感要素」という視点を導入したことは独創的なことであった。その結果、印象的な作品論に終始していた分析に多少とも客観性を付加することができた。特にまどとユンの童謡論と作品の共感要素の分析を合わせて考察すると、いかに二人が自身の童謡に対する思いを創作に実践したかが分かった。それと同時に、二人が童謡に込めた思いの深さは、個々の作品に表れた共感要素の多様さにあると分かった。それは二人の童謡が歌い継がれる十分な傍証となる。

歌い継がれているという実証的尺度は、時代という長い年月の淘汰を経ても歌われ続けているということである。その意味で、日韓とも創作童謡の歴史がほぼ100年を経た現在、まどとユンを手掛かりにした本研究は時宜を得た研究であった。

まどとユンは日韓両国の代表的童謡詩人であるが、それぞれの相手国ではほとんど知られていない存在であった。本研究において、研究者は両国にまどとユンを紹介し、それぞれ高い評価を得た。それとともに、研究者のまど・みちおに関する研究書が韓国版で刊行され、また2020年1月にソウルで日韓童謡国際フォーラムが開催できたことなど、一国という枠組みを超えた交流の道筋がつけられたことは意味のある成果であった。

日韓の交流は学術的視野も広げた。たとえば、まどとユンの共感要素の違いは、それを相互の補完の見方に立てば、童謡の世界の広がりの可能性を示している。同じことは日韓の童謡の現状と将来を考える上でも有用であり、歌い継がれる童謡の共感要素の特徴は現代の子どもを取り巻く歌のあり方の問題指摘、今後の童謡創作に対する指針ともなる。また通時的童謡の検証にも有益と思われる。

引用文献

レイチェル・カーソン『センス・オブ・ワンダー』（上遠恵子訳）新潮社、1996.7.、p.24。（原書名は“THE SENSE OF WONDER” by Rachel Carson）

まど・みちお「童謡の平易さについて」『昆虫列車』第3輯、昆虫列車本部、昭和12年7月、pp.10-11。

ユン・ソクチュン『子どもと一生』、1985.、pp.76-77。

張晟喜「まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較 子どもが共感した世界」『日韓童謡国際フォーラム論文集』張晟喜編、方定煥研究所、2020.1.、pp.5-27。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 張晟喜	4. 巻 －
2. 論文標題 歌いつがれる童謡 - まど・みちお(日本)とユン・ソクチュン(韓国)の童謡創作の意識	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 第15回アジア児童文学大会 論文集	6. 最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件／うち国際学会 2件）

1. 発表者名 張晟喜
2. 発表標題 まど・みちおとユン・ソクチュンの童謡の比較－子どもが共感した世界
3. 学会等名 日韓童謡国際フォーラム委員会（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 張晟喜
2. 発表標題 歌いつがれる童謡 - まど・みちお(日本)とユン・ソクチュン(韓国)の童謡創作の意識
3. 学会等名 アジア児童文学学会（国際学会）
4. 発表年 2020年～2021年

1. 発表者名 張晟喜
2. 発表標題 まど・みちお 童謡 ぞうさん の解釈をめぐって
3. 学会等名 韓国児童青少年文学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 張晟喜
2. 発表標題 まど・みちおの代表童謡ー ぞうさん やぎさん ゆうぴん おさが ふねを かきました を中心にー
3. 学会等名 方定煥研究所・方定煥研究会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 張晟喜	4. 発行年 2020年
2. 出版社 方定煥研究所	5. 総ページ数 84
3. 書名 日韓童謡国際フォーラム論文集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>法政大学国際日本学研究所ホームページ https://hijas.hosei.ac.jp/news/20200131report.html</p>
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考